

流 れ

社会医学・臨床医学の両側面からの研究を目指して

井上 顕¹

1 群馬県前橋市昭和町3-39-22 群馬大学大学院医学系研究科公衆衛生学

文献情報

投稿履歴：

受付 平成28年5月6日

採択 平成28年6月2日

論文別刷請求先：

井上 顕

〒371-8511 群馬県前橋市昭和町3-39-22

群馬大学大学院医学系研究科公衆衛生学

電話：027-220-8013

E-mail: ke-inoue@gunma-u.ac.jp



このたび、THE KITAKANTO MEDICAL JOURNAL「流れ」において私のこれまで行ってきた研究の示唆を含め、紹介の機会がいただけることを光榮に思っている。

私の医師人生は平成14年三重大学医学部精神科神経科入局からはじまり、大学公衆衛生学講座としての所属は平成19年藤田保健衛生大学医学部公衆衛生学からとなる。本学大学院医学系研究科社会環境医療学講座公衆衛生学分野には平成27年4月に赴任し、小山洋教授をはじめ教室の先生方・スタッフ・大学院生・教室に関連する諸先生方にも多大に御配慮をいただき楽しく勤務させていただけることに感謝している。

1. 自殺対策にむけた検討

さて、三重大学大学院医学系研究科博士課程時代から振り返ってみると、当時の私の研究テーマは「三重県下における自殺の特徴(平成8-14年)」であった(指導教官:当時三重大学大学院医学系研究科環境社会医学講座法医学科学分野教授・福永龍繁先生と同大学大学院医学系研究科神経感覚医学講座精神病態学分野教授・岡崎祐士先生)。これは平成7-8年度科学研究費補助金(基盤研究(A)-(2))「日本人の自殺の実態把握と予防医学へのアプローチ」(研究代表者:秋田大学医学部法医学教室・吉岡尚文先生)として平成元-7年における14県の警察本部の協力を得た詳細な自殺動向の調査があり、その中に三重県も入っていたこ

とがベースとなっていた(研究分担者:福永龍繁先生)。平成8-14年の三重県下における調査では男性の「経済的理由」、男性・女性とも「精神疾患」・「身体疾患による病苦」を背景とした自殺が多かったこと、全国同様に殊に男性壮年層における「経済的理由」を背景とした自殺が増加していること等を示した。¹ この研究を論文報告¹とともに当時委員に入れていただいていた三重県自殺予防対策推進協議会(後:三重県自殺対策推進部会)でも示唆し、三重県の自殺対策にむけた社会還元とした。

三重県での自殺対策とともに私の出身地でもあり自殺死亡率が高値の島根県とも有効な自死(自殺)対策を目指した検討も行った。具体的には全国と島根県の自殺動向比較による同県の傾向、² 同県における自殺動向の詳細、³ 自殺死亡率と有効求人倍率との関連等を示した。⁴ 平成24年の自殺総合対策大綱改定以降、地域に即した自殺対策の推進という視点が着目された。7圏域から構成されている島根県でも常に自殺死亡率が高値な大田圏域において早急に具体的対策の必要な壮年層男性を焦点とした多職種構成の自死対策検討会に私も入れていただき継続的に検討を行っている。⁵

他、The International Research Group on Suicide in Older Adults という高齢者の自殺防止にむけた国際検討グループにも平成26年から入れていただき世界各国の自殺防止を目指した対策・活動を学ぶ機会も得ている。

2. パニック症／パニック障害研究

三重大学大学院医学系研究科博士課程・藤田保健衛生大学医学部公衆衛生学在籍時代にパニック症／パニック障害の研究に参加できる機会を得た〔平成16—18年度厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業「パニック障害の治療法の最適化と治療ガイドラインの策定に関する研究」(研究代表者:平成16年度は久保木富房先生,平成17・18年度は熊野宏昭先生,平成17・18年度研究協力者:井上 顕),平成17—21年度文部科学省科学研究費補助金特定領域研究ゲノム「精神疾患の遺伝子探索」(研究代表者:岡崎祐士先生,研究協力者:井上 顕)〕. 同疾患の他研究内容としては, Mini International Neuropsychiatric Interview (MINI:精神疾患簡易構造化面接法)によって,パニック障害(生涯)の診断を満たすことが確認されたパニック障害では「広場恐怖の合併あり群はなし群に比べて女性が有意に多いこと,広場恐怖の合併あり群では自殺の危険・軽躁病エピソード(現在)を認める頻度・社会恐怖を認める頻度が高いこと,重症度・神経症傾向・不安感受性・特性不安が高い」旨を示唆した.⁶

3. その他の研究(共同分担研究を中心に)

高知県・三重県の中学生・高校生計約18,000人の大規模な我々の調査(東京都医学総合研究所・西田淳志先生を主)で,心の健康状態の低下に睡眠不足の影響の可能性を示した.⁷

その他,現在,「夜間勤務における疲労の早期発見を目指した疲労評価法と食生活・微量元素栄養との関連」(基盤研究(C):研究代表者:群馬大学・亀尾聡美先生),「大学生の睡眠リズムと抑うつに及ぼす携帯電話依存の影響に関する時間生物学的研究」(基盤研究(C):研究代表者:島根大学・江副智子先生),「小・中学生長期欠席者の要因解明に関する疫学研究:早期発見と管理体制確立に向けて」(基盤研究(C):研究代表者:島根大学・藤田委由先生),「カザフ核実験場周辺住民の放射性降下物被曝の実態解明—線量評価

及び健康影響解析—」(基盤研究(A):研究代表者:広島大学・星正治先生)等にも研究分担者として参加させていただいている。

おわりに

本稿では私がこれまで行ってきた研究・現在進行中の研究紹介等を述べた。これらの研究では多くの先生方・スタッフ・仲間等に多大なる御指導・御支援をいただいたことに感謝している。また,本学の諸先生方には御支援・御教示いただける機会もあるかと考えているので,その折は御指導いただけたら幸いと思ひ本稿を終わりとす。

参考文献

1. Inoue K, Abe S, Okazaki Y, et al. Underlying factors for the rapid increase of suicide in Mie Prefecture, Japan. *Med Sci Law* 2005; 45: 345-355. Erratum in: *Med Sci Law* 2006; 46: 254.
2. Inoue K, Imaoka M, Nakanishi T, et al. The Importance of Continuing to Implement Additional Suicide Prevention Measures in Shimane Prefecture. *Int Med J* 2013; 20: 6.
3. Inoue K, Mitani K, Karino K, et al. A Report Based on an Analysis of Suicide Trends in Shimane Prefecture. *Int Med J* 2012; 19: 183-184.
4. Inoue K, Tanii H, Ono Y. Association of the ratio of job offers with a recent suicide trend in a rural unprosperous region in Japan. *Psychiatry Clin Neurosci* 2009; 63: 252-253.
5. 井上 顕. わが国における自死対策の重要性と地域における対策としての必要性・方向性. 大田市自死対策検討会 2015年3月9日講演.
6. 井上 顕, 貝谷久宣, 西村幸香, 他. パニック障害患者における特徴—広場恐怖の有無についての視点からの考察—. 第2回日本不安障害学会学術大会. 2010.
7. Tochigi M, Nishida A, Shimodera S, et al. Irregular bedtime and nocturnal cellular phone usage as risk factors for being involved in bullying: a cross-sectional survey of Japanese adolescents. *PLoS One* 2012; 7: e45736.